

温 故 知 新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (52) 平成 14 年 8 月 1 日

農学・本草学シリーズ

李時珍の『本草綱目』(499.9/リ及び 466.9/イ)

『本草綱目』は李時珍の記した中国明代の百科全書的な本草書です。52 巻附図 2 巻よりなっています。著者の李時珍は 1518 年に今の湖北省の医者の子に生まれました。幼い頃は体が弱く、発熱を繰り返すという闘病経験から、彼は医者を目指し、官吏を薦める父の反対を押し切って医者になりました。李時珍の医者としての名声は高く、皇族や政府高官から招かれ治療に当たることもあり、さらに皇帝が名医を太医院に集めた際に、李時珍も招聘されました。このため貴重な医学・薬学書や外国産の薬にも触れることができました。彼は上司にこれまでの薬学の本の改訂を勧めますが、採用されなかったため、太医院を辞し郷里で医療活動を行いながら更に研究を進め、各地をめぐり治療方法を調べ、多くの薬を集めてまわりました。官を辞し、25 年余の歳月を費やし、1578 年(60 才時)頃に脱稿し、彼の死後 3 年たった万暦 24(1596)年に初版金陵本(金陵は現在の南京)が刊行され、明・清代に各種刊本がつけられました。

李時珍は、それまでの本草学の薬物の上中下 3 品分類を廃止し、自然物の種類を 16 部に配列分類し、それぞれを 60 類に分けて配列しました。薬物解説では、薬の正式名称を「綱」として書き、その直ぐ下には、その名称の出典名を記しています。綱の下に釈明(薬の別名や正名と別名の由来)・集解(産地や採集時期、採集方法、原色物の形状、古書の記録)・正誤(疑わしいものを分け、誤りを正す)・修治(薬の製法)・気味(寒温などの別や有毒・無毒の別)・主治(薬の効用)・發明(不明な点に対する解釈)・附方(処方の方)の 8 の「目」を設けて記載しております。この構成が「本草綱目」の名称のもとで、解説にも重点をおいた本草書は『本草綱目』が最初であり、高い評価を与えられる理由の一つです。

最初に『本草綱目』が日本に伝わったのは、慶長 12(1607)年で、幕府の医師林道春が長崎で手に入れ、幕府に献上した時です。1672 年に貝原益軒が植物の和名(日本名)と訓点を施した本草綱目貝原本を著し、1714 年に稻生若水が本草綱目若水本を著しました。『本草綱目』の「集解」の詳細さから、薬物書でありながら、博物学的な特色を持つことになりました。この特色に強く影響され日本の江戸期の本草学者達は、この書から採薬・鑑識の知識を得て、さらに野外で実際に採薬をする研究態度も広め、日本の博物学が興隆することとなりました。このように江戸期の本草学は『本草綱目』の影響下

で発展しました。この『本草綱目』に刺激され、発展した日本の本草学は、さらに飢饉を生き延びる術を教える『救荒書』の成立の要因の一つとなりました。当館の所蔵資料は、1714 年の刊行です。

【参考文献】

『薬草博物誌』(499.8/38)

『江戸の博物学者たち』(499.9/9)